

Title	医師と回転機 : 19世紀における医療・技術・職業
Author(s)	山中, 浩司
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49454
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 大阪大学の博士論文について をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【22】

氏名	山 中 浩 司
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学位記番号	第 2 2 5 8 0 号
学位授与年月日	平成 21 年 1 月 29 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	医師と回転機— 19 世紀における医療・技術・職業 Doctor and Rotatory Machine : Medicine, Technology and Profession in the Nineteenth Century
論文審査委員	(主査) 教 授 木前 利秋 (副査) 教 授 牟田 和恵 教 授 川端 亮

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、19世紀における医療技術と医師の関係を扱ったもので、精神医学と実験室医学とそれぞれにおいて用いられた技術の社会的コンテクストについて、おもに、科学技術論、科学社会学、プロフェッション社会学、医学史において発展させられたアプローチやコンセプトを併用しながら分析したものである。全体は6章から成り、第1～2章では理論的な考察を、第3～6章では19世紀の精神医学と実験室医学を事例とした分析を行っている。第1章においては、科学技術論と科学社会学・技術社会学において展開されてきた「技術と社会」の関係をめぐりいくつかのアプローチについて検討を加え、それらの問題点や利

点を考察している。ここで扱われたアプローチは、1) 技術決定論、2) 社会構築主義、3) アクターネットワーク論、4) システム・アプローチ、5) 経路依存・共進化である。それぞれのアプローチが扱うことができる事象の範囲、そのイデオロギー的な意味、論理的な長所などについて検討を加え、本論文で利用できる論点を抽出した。第2章では、プロフェッション社会学と医療・医学史において展開された議論を概括し、医療プロフェッションと技術の関係を扱う上で本論文で特に留意した論点を抽出した。扱った議論は、プロフェッション社会学では、機能主義、権力論、セグメント論・システム論、官僚制化論、脱プロフェッション論、医療・医学史では、3つの医学論、専門化論、標準化論である。これらの議論の中から、特に以下の四つの問題に焦点をしばり、有効な議論を抽出した。すなわち、1) プロフェSSIONナリズムと官僚制と市場の三者関係をめぐる問題、2) 紛争・交渉・管轄権の問題、3) 医師—患者関係、4) 知識と権威の問題である。第3—5章は、19世紀における施設精神医学と心理療法（モラル・トリートメント）の関係を扱っている。第3章では、これまで社会学や歴史学において行われてきた施設精神医学についての批判的研究をとりあげ、その問題点を指摘している。従来の施設精神医学に対する批判的研究の多くは、一般医学の発展や他の科学に対する評価や理解とは異なった形での解釈を行っている。1990年代以降、一般の最先端の科学についてもさまざまな倫理的社会的な問題が指摘されるにつれて、精神医学についても一般医学や科学の枠組みの中に戻して考える傾向が顕著である。本論文は、こうした流れを前提として、いわば「精神医学のノーマライゼーション」の中で、施設精神医学はどのように解釈されるべきかを問うものである。ここでは、19世紀に発達した施設精神医学について、以下の3点を中心に考察を加えている。すなわち、1) 施設精神医学における制度的な特徴とそこにおけるプロフェSSIONナリズム、クライアント、管理機構の関係、2) 施設精神医学における管轄権、3) 施設精神医学における医師—患者関係である。第3章の後半では、施設精神医学と心理療法の関係について、従来の解釈で注目されてきた3つの側面（イデオロギー的・社会統制的側面、科学的側面、慈善的側面）のうち、科学的な側面に重点をおいた場合に問題となるいくつかの論点をまとめている。第4章では、雑誌メディアにおける心理療法の扱われ方について、18世紀後半—19世紀初頭のプロイセンを事例として分析を行っている。調査の対象としたものは、1750-1815年の期間に発行された医学系雑誌62誌、一般雑誌157誌で、医学系雑誌については主に現物の実地調査によって、一般雑誌については、IDZというドイツで制作されたデータベースを利用して行った。精神疾患、心理療法、精神施療院について雑誌メディアでどのような記事がどの程度存在するかを、対象時期を3つの時期（1750-1780, 1781-1800, 1801-1815）に区分して分析を行った。この結果、プロイセンでは、英仏で生じたような精神施療院のような施設と心理療法の関連は、少なくとも19世紀初頭にいたるまで希薄であり、その関心の担い手は、初期には文芸雑誌や医学啓蒙雑誌、後期にはアカデミック医学であり、後期になるほど心理療法への関心の背後に学術的な関心が強まっていることがわかった。アカデミック医学における心理療法や精神疾患への関心が、プロイセンにおいては、精神施療院のような施設と切り離されているということのもう一つの証拠として、当時精神疾患の分類として医師の間で常用されていた「マニア」と「メランコリー」がプロイセンの英仏の精神医学の著作物の中でどのように扱われているかを検討した。その結果、英仏においては当時の心理療法の主要なターゲットが「マニア」患

者であるのに対し、プロイセンでは「メランコリー」であることがわかる。このことの理由は、精神施療院などの施設においては通常「マニア」患者の数が「メランコリー」患者を圧倒しており、施療院において活動する医師の第一の関心は「マニア」患者に向かうのに対して、一般病院や開業医においては「マニア」患者に遭遇することは稀で、むしろ「メランコリー」患者との接触がもっとも頻繁であることにありと推測される。第五章においては、19世紀初頭にベルリン・シャリテ病院で起こった精神疾患患者の死亡事件をめぐるスキャンダルについて、主に公文書資料に依拠しながら分析を行った。シャリテ病院内におけるさまざまな権限関係、医師の管轄権、内科医と外科医、アカデミシャンと医療官僚などのプロフェSSIONの関係分析の軸としながら、スキャンダルにおける関係者のポジショニングを特に問題とした。この分析においては、スキャンダルに対する同時代の医師たちの反応の背後に、アカデミック医学と医療官僚の対立関係が存在することが明らかとなった。こうした対立の背景には、19世紀における医学教育改革の二つの対立する構想（アカデミシャン的構想と官僚的構想）がある。ここでは医学内部のセグメントの存在が、スキャンダルの告発やその進展過程に重要な影響を及ぼすことが示され、また、施設精神医学に動員され、後に社会的に問題となるいくつかの器具が、心理療法のイデオロギー的な側面や慈善的な側面の産物ではなく、同時代の医学の実験的で科学的な傾向の産物であることも示された。第6章では、顕微鏡と実験室医学の関係を扱っている。ここでは、顕微鏡が医学において利用される以前の状況、この器具に対する医師の不信感の理由、顕微鏡が受け入れられた地域とそうでない地域についてその社会的コンテクストを提示している。残念ながら、顕微鏡の導入によって成立する病理医のようなプロフェSSIONの特性と他のプロフェSSIONとの関係については、とりあげることができず今後の課題としている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、18世紀から19世紀にわたるプロイセンにおける施設精神医学、心理療法としてのモラル・トリートメント、顕微鏡と実験室医学等をテーマとして取り上げながら、精神医学における医療技術とプロフェSSIONの成立過程を、医療社会学とSTS（科学技術社会論）研究の方法に依拠して考察した論考である。より具体的には、19世紀プロイセンの精神施療院（アサイラム）を事例にしなが、医療行政に関わる医療官僚の改良主義的な実践的なキャンプと大学に拠点を置くアカデミック医学の実験的なキャンプとのあいだの対立と交渉を通じて、施設精神医学が発展し、プロフェSSIONナルとしての医師の地位が確立していった経緯が明らかにされている。

本論文が注目されるのは、第一に取り上げられた対象が他に類をみないオリジナルなものである点である。本論考のための研究を進めるにあたり、著者は18世紀および19世紀プロイセンの医療および科学雑誌の資料・データベースを丹念に調査し、関連記事の緻密な分析を試みることで、精神医学にたいする関心や意識を描きだしている。第二に興味を引くのは、ベルリン・シャリテ病院のスキャンダルや顕微鏡、心理療法など取り上げられた題材のおもしろさである。病院内で内科医と外科医との軋轢、アカデミック医学と医療官僚との対立などが、そうした題材を生き生きと描きだ

す構図になっている。第三に指摘してよいのは、分析を進めるさいの方法論的な意識を明確にしている点である。著者は論文の第一章と第二章を割いて、STS研究のなかでおこなわれてきた技術と社会に関する議論の諸潮流を整理し、プロフェッション研究におけるさまざまなアプローチを検討しているが、その結果として、医療技術や方法が医療プロフェッション内部にもちこむ紛争と交渉を理解するためのセグメント論を方法論の主軸においている。

ドイツ語原典にあたりながらの丹念な調査、方法論的な反省に立った意識的な分析、日本ではまだ知られていない題材の緻密な描写など、いずれの面でも、オリジナリティに優れた論文である。

以上の理由から、本論文は、博士（人間科学）の学位論文として十分に値するものと判定した。